蜀漆

スル説ハ非ナリ、

〔新撰字鏡 木〕蜀漆 山宇豆伎乃苗

〔本草和名 十草〕蜀漆葉　恒山苗也、一名恒山舟、出釋藥性和名久佐岐、一名也末宇都岐乃波、

〔倭名類聚抄 二十木〕蜀漆 恒山附　新抄本草云、蜀漆和名久佐木、一云夜末宇豆木乃禰、恒山苗也、恒山和名宇久比須乃以比禰、一云久佐木乃禰、

〔箋注倭名類聚抄 十木〕本草和名草部下、蜀漆下有葉字、禰作波、按本草無葉字、而本條云、五月採葉陰乾、是入藥用葉、御覽引吳普云、蜀漆葉一名恒山、則知本草本有葉字、無者係宋人所删、輔仁所見唐本、故有葉字、與吳普合、本草和名載云蜀漆葉、訓爲也末宇都岐乃波、而此引無葉字者、似源君以非藥用所删去、則和名乃波二字、亦宜纂節而改作乃禰、非是、其恒山苗也四字、亦本條之文、非輔仁注語、源君引新抄本草載之非是、千金翼方、證類本草、作常山苗也、蓋宋人避眞宗諱所更改也、吳普云、如漆葉、與藍菁相似、又引范子計然云、蜀漆出蜀郡、廣雅、恒山、蜀黍也、黍正字、漆假借字、王念孫曰、葉曰恒山、苗曰蜀黍、其實一物也、蜀本草圖經、乃謂常山葉名蜀漆、本草衍義、又謂常山爲蜀漆根、皆誤矣、○中略本草和名作和名久佐岐、一名宇久比須乃以比禰、此乃禰二字亦恐衍、漢書地理志、武陵郡很山、孟康曰、音恒、出藥草恒山、

〔東雅 十六樹竹〕蜀漆 クサキ ○中略　或人の説に、此木中心空疏（ウツボ）なれば、ウツギといふといへり、萬葉集に、于花（ウノハナ）、宇の花など見えて、卽今卯の花といふものは、其ものゝ花をいふなり、卯花の義は、前の月名の註に見えたり、蜀漆をば東壁本草に草部に錄したり、此にいふものと異なりと見えたり、こゝにいふクサギは、臭桐または臭梧桐などいふ物也、臭桐は外科百効全書に見え、臭梧桐は群芳譜に見えたり、

〔本草一家言 二〕常山　蜀漆　根爲常山、葉爲蜀漆、種類最多、皆係于木屬、本艸誤收入草部、今移于此、